

We're Constantly Adapting

■ 当期(2010年3月期)は黒字転換

当社グループを取り巻くエレクトロニクス市場は前期(2009年3月期)後半に大きく収縮したものの前期末には底入れし、当期に入り緩やかな回復となりました。デジタル家電分野においては拡大する低価格製品の需要が価格競争に拍車をかけ、それがさらに需要拡大を呼ぶといった現象が続いた反面、スマートフォンなどのように経済停滞

期においてさえ成長著しい高機能製品もあるという、いわゆる製品の二極化現象が顕著に見られました。自動車産業は燃費効率のさらなる改善を追求し、ハイブリッドカーの需要が増加するとともに、電気自動車の開発競争も一段と激しくなりました。また、自然エネルギーの有効利用を目的とした風力発電等への投資も伸びました。



(左)
澤部 肇
代表取締役会長

(右)
上釜 健宏
代表取締役社長

このような環境のもと、当社グループ製品の受注や販売も市況の回復に伴って増加傾向が続きました。加えて前期に実施した構造改革が当期の業績改善に貢献し、当期は売上高が前期比11.2%増加の8,089億円、営業利益が258億円(前期は543億5百万円の営業損失)、当期純利益が135億円(前期は631億60百万円の当期純損失)と前期赤字決算を1年で黒字に戻すことができました。

■ 取り組むべき課題

しかし、私たちはまだ業績回復を手放しで喜べる状況にはありません。エレクトロニクス産業は回復基調にあるとはいえ、世界同時不況前の状態に戻ったとは言えず、同市場の完全な回復には数年を要すると思われる。このように低迷した市場環境においては、事業の問題点や課題がより鮮明に浮かび上がってまいります。

当社グループの業績を個別事業の観点から分析いたしますと、リーディングポジションを維持するHDD用ヘッド事業は市場変化に比較的うまく対応し、収益構造を改善できた事業ですが、セラミックコンデンサその他の受動部品事業の改善は道半ばです。市場や事業環境の変化に対応する適応力の差が業績の差となって表れました。

また、グループ全体の視点からも、問題を認識していません。例えば、

- 原価率の改善が進んだのか
- 生産性、生産効率の改善は進んだのか
- 新製品の投入は計画通り進捗したのか
- 需要変化に対応する製造の対応力は十分であったか
- 為替変動の波にさらされ円高の影響を大きく受けた中で、競合他社に負けない事業体質が確保できたのか

などの問題認識に加えて、投資効率の観点からみますと、

- 過去の積極的な設備投資や企業買収により、総資産が増加したにもかかわらず、その規模に相応しい売上、利益を未だ実現していないことも課題であります。

このように、当期の業績を分析いたしますと、未だ改善の余地ありと判断できる問題点が少なからずあります。冒頭に業績回復を手放しで喜べないと申し上げたのには、このような分析があるからです。

来期以降に向けての具体的な課題を経営指標の観点から挙げますと、損益分岐点をより一層引き下げ、収益構造を強化すること、引き続き生産リードタイムを短縮し、在庫を圧縮すること、固定資産回転率や総資産回転率等資産効率指標を改善すること、販売費一般管理費比率を改善すること、等です。

また、事業分野の観点からは環境・エネルギー・通信・自動車といった成長分野を重点的に強化し、成長の柱に育てなければなりません。さらに、従来のデジタル家電分野のみならず、産業機械分野向けの部品も品揃えを強化する必要があります。これらの課題に対して具体的に達成すべき目標値と期限を定め、スピーディに行動することで収益構造を一層強化し、競合他社に匹敵、さらには凌駕する事業体質をつくり上げる所存です。

■ 「独創性」こそTDKの原点

2009年10月、東京工業大学とTDKは「フェライトの発明とその工業化」について「IEEEマイルストーン」*に認定されました。磁性材料「フェライト」がTDKによる工業化を通じてエレクトロニクスの発展に貢献し、発明からほぼ80

年経った今日でも、さまざまな新製品や新技術を生み出していることが高く評価されたものです。

世界初のフェライトを事業化したTDKは設立当初から「独創性」を尊ぶ社風を持ち、現在にまでその精神が受け継がれております。特に、素材開発はTDKの原点であり、これこそTDKの価値を高める根本技術であるとの認識は創立から75年経過した今日でも変わることはありません。すなわち、フェライトはフェライトコアとなってインダクティブ・デバイスの素材となり、インダクティブ・デバイスはトランスとして電源に搭載される、というように当社グループが手がける部品事業において、フェライトは他の製品の性能をも左右する重要な素材だからです。また、誘電体材料に関しても同様の展開を行っています。この生命線とも言える素材技術をもとにプロセス技術・評価シミュレーション技術を組み合わせることによって、今後も市場ニーズに合致した特長ある製品を開発、投入してゆきます。

■ 次の成長と飛躍に向けて

私たちは、経営の使命は「企業価値の最大化」にあると認識しています。すなわち、電子部品事業を通じて当社グループが創造した価値を株主及びすべてのステークホルダーへ提供し、持続的な成長を果たすことこそが経営の重要な責務であります。このことは、とりもなおさず当社グループの社是である「創造によって文化、産業に貢献する」に通じます。

こうした取り組みを通じて、私たちはTDKの原点を忘れることなく成長を目指してまい進してまいります。新たな価値を提供し続けることで文化、産業に貢献し続けるTDKに、どうぞご期待ください。

* IEEE (正式名称:The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc.)はアメリカに本部のある世界最大の電気・電子技術者による非営利団体組織(学会)。IEEEマイルストーンはIEEEが電気・電子技術およびその関連分野において、開発から25年以上経過し、社会や産業の発展に多大に貢献した重要な歴史的偉業を称えるために1983年に制定。これまでに、ボルタ電池やフレミングの二極管など約100件(2010年4月時点)が認定されています。

澤部 肇

代表取締役会長
澤部 肇

上釜 健宏

代表取締役社長
上釜 健宏